事情が周辺の国の王朝の設立を促し、一つのロマンスを生む環境だったのであろう。倭寇の跋扈が収まると同時に琉球王朝がほぼ独占していた明の文物を扱う貿易体制も徐々に元に復し、琉球の後を襲うように福岡、長崎の商人が活躍したのは荒木宗太郎の項で述べたとおりである。期を一にして琉球王朝の衰退も始まるのである。

いまや福岡空港とハノイは週に二回直行便が飛び、所要時間は４時間を切る。また日本の文部科学省は、各大学の尻をたたいて特に東南アジア地域に橋頭保を築き、将来日本の大学を背負って立つ事になる（かもしれない）人材を当地に求めよ、とのシグナルを盛んに出しているように見える。いまや日本の大学にとって海外から留学生を取るという事は、単に大学院の定員を埋めるとか国際協力とかいう意味合いではなく、大学の存亡を左右するものと心得てかかるべきである。アニオー姫の時代から数世紀が経過するが、東シナ海・南シナ海を取り巻く国々の、お互いの重要性は、実はさほど変わっていないのかもしれない。

光陰矢のごとし

大 城 吉 則
（琉球大学 泌尿器科）

同窓会の皆様、こんにちわ。２期生の大城です。私たち２期生は1988年に卒業し、2013年の今年で卒後ちょうど25年、すなわち４半世紀が過ぎたことになります。卒業した頃は25年後の自分の姿をなかなか想像出来なかったのですが、現在の自分を振り返ってみますと、この25年間に医師･人間としてどの程度成長できたのだろうか？と白く薄くなった頭髪を撫でながら不安になることが時々あります。私が専門とする泌尿器科領域の医療もこの25年間に急速に進歩し、我々が医師になったころと比べてその医療の内容、質も様変わりしてきています。例えば、開腹手術が主であった泌尿器科癌の手術の多くが鏡視下手術に置き換わり、前立腺癌に至ってはダヴィンチによるロボット手術（琉大では未導入）が昨年から主流になってきております。これまで有効な抗がん剤のなかった転移性腎癌については、この数年で様々な分子標的治療薬も使われる様になり、治療成績も少しずつ向上してきています。また、私の専門とする腎移植の領域においても、昔の教科書では禁忌と記載されていた血液型不適合腎移植も免疫抑制療法の進歩により、通常の腎移植と変わらない普通の移植医療となってきています。私は母校の琉大医学部泌尿器科に在職しておりますので、幸いにも各種の学会・研究会等に参加し最新の医療情報を得る機会にも恵まれており、この急速に進歩している医療の状況に遅れないようにアンテナを張り巡らせながら、必死に‘catch up’をするよう努力しているところです。

話は変わりますが、昨年は医学部第32期生の学生、つまり私たちよりも30年も若い世代が後輩として琉球大学医学部に入学しました。私はその第32期生の指導教官を務めることになり、入学式にも出席しましたが、夢と希望に満ちて入学した当時のことが鮮明に思い出されました。名簿や学生さんの話を聞くと同窓生のご子息の方、親戚の方も結構いるようです。これまでは主に自分自身および泌尿器科医局の若い医師の知識・技量を伸ばすことに専念しておりましたが、これからはさらに、未来の医師となるため夢と希望に満ちて入学してきた学生の教育にも何等かの貢献ができればと考えている今日この頃です。

最後に、この拙文を書いていると、『光陰矢のごとし』、『少年老いやすく学なりがたし』ということわざが自然に頭に思い浮かんできました。今後、10年後、20年後にもこのような文書を書く機会があるかもしれませんが、その時にもこのことわざが思い浮かぶのだろうか？と感じながら文章を締めているところです。